

ムラサキ

学名：*Lithospermum erythrorhizon* Sieb. et Zucc. 科名：ムラサキ科



日本最古の和歌集である万葉集には「紫草」という植物が多く登場します。この紫草は染料や漢方薬に使われるムラサキという薬草なのです。

ムラサキは6〜7月に白色の小さな花を咲かせます。その可憐な姿とは反対に根は太く暗紅紫色をしています。この根を「紫根」と呼び、紫根の主成分である「シコニン」には消炎作用や抗菌作用があるとされ、古くから漢方薬に使われてきました。江戸時代に軟膏として使用され始め、現在でも切り傷や火傷などの皮膚疾患や痔疾患に適する万能薬として知られています。

また、ムラサキは染料としても利用されており、その稀少性ゆえに高貴な色・権力の象徴として古くから扱われてきました。そのようなムラサキも、今では野生種が見られなくなり絶滅の危機に瀕しているため、植物園でしか見ることができません。

ぜひ、悠久の時代に思いを馳せながら、植物園に足を運んでみてはいかがでしょうか。

生薬名	紫根（シコニン）	局方生薬
薬用部位	根	
薬効	消炎、解熱、解毒作用	
用途	皮膚疾患、痔疾の外用薬として紫雲膏に含まれる。染料の古代紫として用いる。	



ミズバショウ

学名：*Lysichiton camtschatcense* (L.) Schott 科名：サトイモ科



ミズバショウは、雪の多い地域の湿原や湿った草原、水の湧き出るところ、沼などに自生する多年草です。花は5〜7月に咲き、白い仏炎苞（ブツエンノウ）に包まれ、厚い円柱状の花序に黄色の小花が多数つきまします。白い仏炎苞は、仏様の後ろ側にある炎形の飾りに似ていることからつけられました。葉は、想像を絶するほど大きく、1mにもなります。

美しい見た目のミズバショウですが、有毒植物です。葉から出る汁が肌に触れるだけで、かぶれてしまうこともあります。また、誤って口にした場合は、吐き気や呼吸困難などを起こすこともあります。しかし、葉はツキノワグマの大好物です。ツキノワグマは、冬眠後などに体内の老廃物等を排出するために嘔吐剤、下剤としてミズバショウの葉を食べます。この習慣を人間は絶対に真似してはいけません。

ミズバショウという名は水辺に生え、花のあとに出る大きな葉がバショウに似ていることからつけられました。

生薬名	海芋（カイワ）
薬用部位	根茎
薬効	有毒
用途	便秘、発汗、急性腎炎、痔などに用いられた。



クサノオウ

学名： *Chelidonium majus* L. subsp. *asiaticum* Hara 科名：ケシ科



平地の道端、草地、石垣などで、黄色い花をつけ、いんげん豆のような細長い果実をつけた植物を見たことがありますか。散歩をしている最中にこの植物を見つけても決して触ってはいけません。茎を折るか葉をちぎると、傷ついた所から鮮やかな黄色の乳液が出てきます。この汁はイボや魚の目が溶けるほどの腐食性があります。また、汁が空気に触れると濃いオレンジ色に変色し、洋服につけるとシミになり、昔の人がこれを利用して羊毛や布を染めたとされているほど落ちにくいそうです。

クサノオウの草丈は50 cmほどで、茎や葉には縮れた毛があります。花期は5〜7月で黄色い4枚の花びらがあります。全体が柔らかく粉白色を帯びています。

数多くのアルカロイドを含んでいるため、鎮静薬に使われてきました。その他にも、皮膚疾患、肝臓薬、胆のう薬など様々な疾患に使われます。そのため、草の王様ということ、「クサノオウ」という名前になったと言われています。

生薬名 白屈菜（ハククツサイ）

薬用部位 全草

薬効 鎮痛、知覚末梢神経の麻痺作用

用途 湿疹、疥癬、たむし、イボなどの皮膚疾患の外用薬

